

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画 talk baton 10 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのボタンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などぎゅっばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



安井建築設計事務所から徒歩1分、エル・大阪の地下1階のプチ・エル。少々わかりづらい出入口のこのスタジオに置かれたスタンウェイのピアノを前に、黒のシックな服装でひらりと現れたのは宮武の高校の同級生でピアニストの前田裕佳氏。残暑厳しい金曜の夜、久しぶりに体験する大学の授業にも似た前半戦の建築と音楽についての講義と、分析的で優雅なピアノ演奏を含めた設計者とピアニストによる異色のトークイベント、talk baton10「建築とリズム」が開催された。

■“間”の芸術

前田「音楽は時間の中にあり、建築は空間の中のある、どちらも“間”の中の芸術だと考えていて、両者はこの何らかの“間”に存在しているという共通点があると思います。」
リズムの語源はギリシア語のrhythmosで「流れる」という意味であり、音楽では組織化された時間の流れという意味で「リズム」と言う言葉を使い、とても重要なキーワードとなっているという。

前田「建築にも組織化された流れ（リズム）のようなものがあるのだらうと思って、お互いの共通点のようなものを探りたいという意味もこめて、今回のトークボタンのタイトルは『建築とリズム』というものにしました。」

前田「建築と音楽に纏わる言葉も非常にたくさんあります。」

“建築は凍れる音楽である”“音楽は建築的な時間と空間である”“音楽＝振動する建築”など、それぞれの分野の先人が残した建築と音楽を互いにたとえに利用した言葉は多い。創り出すものはそれぞれ異なるが、共通する思想のようなものを感じ、また、お互いに敬意を表してきたからではないかと考えられる。

■音楽を建築で、建築を音楽で表現する

前田「歴史的にはルネサンス期の大聖堂そのものを音楽によって、表現しようとする試み、フィレンツェのサンタマリアデルフィオーレでは平面形状と高さの比率をG.デュファイの《バラの花が先ごろ》の拍数比と整合させて建築を音楽で表現しています。これは建築のために創られた音楽の例です。」

前田「また、現代ではコルビュジエの弟子でもあり、作曲家でもあるヤニス・クセナキスは1958年のブリュッセル万国博覧会でのフィリップス館の設計の際に、数学的な思考によって幾何学的な建築を創っています。クセナキスは設計に際して双曲放物面や円錐局面の幾何学を採用し、壁・柱・屋根が一体化しつつねじれた連続的な形態を誕生させています。これは、それよりも以前に作曲した《メタスタシス》という楽曲の下行型グリッサンドの連続面から着想を得たということです。こちらは逆に、音楽から着想を得て創られた建築の例です。」

前田氏のiPodから流れる《バラの花が先ごろ》、《メタスタシス》を聴いても建築との直接的な関連はわかりづらいが、建築と音楽は歴史的につながり、影響を与え合っていたということは想像・理解できる。

■楽譜という設計図の分析

今回、計4曲の楽譜に対する前田氏の分析を見せてもらった。ピアニストによる楽譜の分析を見るのは初めての経験だ。

例えばフランス人作曲家ピエール・ブーレー



前田氏の講義



スタンウェイピアノによる生演奏



生演奏を聞き入る聴衆たち

Member's Forum

会員投稿の頁

ズの《天体暦の1ページ》では曲の中で断絶を表現するとともに、小さな宇宙の集合体が大きな宇宙を創り出すというメッセージを伝えているという分析。(下図前田氏の分析イメージ参照)

前田「分析譜の中頃のうねうねの線が描かれている部分の音は、それぞれ、冒頭の8つの音に由来し、その(音高は少し違うが)拡大されたものと解釈することができます。小宇宙が大宇宙を創るみたいな。最後はラのナチュラルに移行し、強引な言い方をするとこの曲は、結局色々あったけど、分析譜の下段のように、ラからラのナチュラルに半音だけ移動しました!的な。ラドレミファソ等の音や、断絶を表したうねうねを超えて、音をいろいろ回って、でも全体としては結局少ししか進んでいないみたいな…、まるで地球が自転しながら少しずつ公転するように……」音楽ど素人の僕にはとても理解できないが、前田氏の生演奏を聞かせてもらい、何となく宇宙の創造の表現、そんな気もしてくる。作曲者が考えたであろう、世界観を分析し、演奏する。その解釈は各々演奏するピアニストによって異なるのだろう。同じ楽譜を同じピアノで演奏しても演奏者の理解と解釈によって(技術的な差だけでなく、)全く異なる印象となる理由も少しわかった気がする。建築にも同様の共通点がある。設計図は設計者の言葉以上にものを語る。設計図を分析することで設計者の思考や思想、情熱や苦悩を読み取ることができる。

また、同じ敷地条件でも設計者による分析と解釈は千差万別で異なる設計者が計画すれば当然異なる建築となる。設計者も演奏者も分析と解釈がその人オリジナルな視点となる。

■留学経験とピアニストとしての振る舞い

先行きが見えない、霧がかかったような状態だった大学時代。

前田「パリ留学、大学院修了を経てピアニストとして生きる覚悟が芽生え始めました。」

留学先では簡単には折れない強いメンタルと、ピアニストとして心構えを学んだ。

前田「最初は授業中の言葉がついていけない中、その上演奏まで遅れたら完全に見捨てられると思って、必死で食らいつきました。また、以前はピアニストとして自分にどのような個性があるのかを考えていましたが、今は作品のために、と考えるようになりました。作品のことを真摯に分析し、何が大切なのかを考える内にピアニストとしての思考や個性が自然とにじみ出てくることがわかったからです。今はそれに生きがいを感じています。」

■限界を超えるときはいつも一人

前田「ピアニストとして華やかなのは演奏会のほんの一瞬で、普段は地味で孤独な作業です。もう無理だと思うこともたまには(というか結構)あります。」

そういう時に支えにしているのは指揮者のサイモン・ラトルが『ベルリン・フィルと子どもたち』というドキュメンタリー映画で語った「限界を超える努力は孤独なもの」という言葉。毎日孤独に練習を重ねながらこの言葉を復唱しているとのこと。早口にぶつぶつ呪文のように唱える前田氏を想像するとかなり不気味であるが。。

建築も同様に、設計により空間やカタチを創造する際にはある種の孤独と「生みの苦しみ」を伴う。ものづくりの苦悩はみんな同じだ。

■ルーティンを大切に

前田「ピアニストの仕事はONとOFFの切り替えが難しいんです。」

華やかなコンサートなどが開催され、ONとOFFははっきりしていそうなイメージだったので少し意外だったが、業務時間のようなものがなく、朝から晩までずっと演奏のことを孤独に考え、練習を行うとのこと。そのため、日々のルーティンをとても大切にしている。

前田「3年前に少し体調を壊した経験以来、生きていられること、演奏できることにとても感謝しています。」

演奏前にも、もちろん毎回決められたルーティンがあるという。それを行った後、今までお世話になった方々への感謝の気持ちを持って演奏すること。

前田「ラグビーの五郎丸選手じゃないけれど、ピアニスト(音楽家)にもルーティンがあり、一種のアスリートのような存在だと思っています。」

スポーツ選手と同様、音楽家もその日、その場で自分の持つ目いっぱいを出し切ることが求められる。ルーティンによって最高のパフォーマンスを出し切れるコンディションの調整をととても重視している。

前田「演奏は誰かに変わることが出来ないけれど、変わりはたくさんいるんです。」

プロピアニストとしての危機感と負けてられないという強い心を見た。

■目標をいつのまにか超える

前田「目標の達成を目指すのではなく、時間をかけていつの間にか目標を超えていれるようにということを心がけています。」

■やっぱり早口でおしゃべり

当日の観客からのコメントにもあったが、プロフィール写真から想像される寡黙とおっとりとした印象とは間逆で、前田氏はやっぱりものすごく早口でおしゃべりだった。

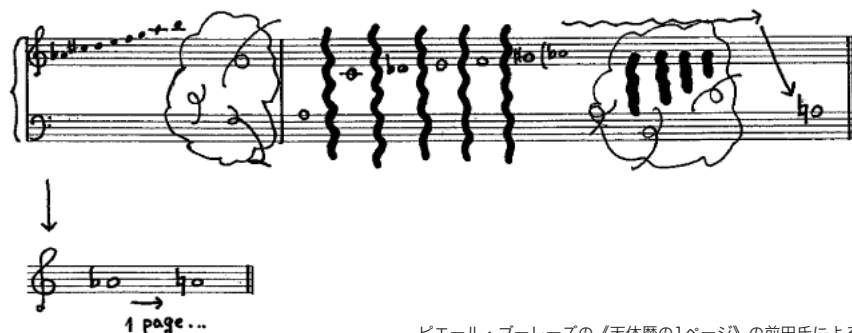
ピアニストの世界にもコンペティションがあり、最近、再来年の1月に開催されるリサイタルの機会を頂いたと話していた。

ぜひ聴かせてもらいに行きたい。



イベント後の2回戦目トークバトル

P.ブーレーズ《天体暦の1ページ》 Pierre Boulez Une page d'ephéméride (2005)



ピエール・ブーレーズの《天体暦の1ページ》の前田氏による楽譜分析

talk baton 10 を終えて

建築と音楽に直接的な強いつながりが常にあったわけではないと思うが、創造への取り組み方やその姿勢にはとても近いもの、共通点あると感じた。

対 談 日: 2016.8.26

場 所: プチ・エル

(大阪市中央区)

モデレーター: 宮武 慎一

(安井建築設計事務所)